

肥育データを分析し V Aコントロールを確認、素牛導入に活用する

肉牛肥育は、素牛の導入から出荷まで1〜2年かかる。肥育成績には血統、飼養管理、給与飼料、導入する素牛などさまざまな要因が影響する。成績改善には、経験だけでなくデータ（血液検査、枝肉成績）を基に分析し、より適した素牛の導入と飼養管理の実施が必要だ。今回はデータを活用し、導入に活かしている生産者を紹介する。

把握し、適切なV Aコントロールを実施した。最近では、去勢に比べ素牛価格が安い雌の導入が増えたため新たにデータを蓄積していく必要がある。

し、その産地、血統に適した飼養管理體系に改善をする。

農場全体の枝肉成績が向上

このような取り組みにより、成績は徐々に向上している。平成21年1〜3月期に比べ、平成21年4〜10月期は、雌の枝肉重量が増加。去勢、雌ともにバラの厚さ、ロース芯面積、BMS No.は増加している（図2）。今後も継続して、導入した素牛の情報と血液データ・枝肉成績と照らし合わせ、なぜよかったのか、悪かったのかを分析し、さらに農場に適した素牛の導入に活かしていく。これまでは枝肉重量を大きくすることだけを求めてきたが、今後は購買者が売りやすい枝肉の大きさ、肉質をつくるのが目標である。

適切なV Aコントロールを確認

黒毛和種肥育では、18〜20カ月齢で適度にV Aを低下させることでサシが向上するといわれている（図1）。この農場では、18〜19カ月齢の血液分析結果（目安は、この時期にV A濃度を30〜40IU/dlにする）と枝肉成績結果を比較し、飼養管理・給与体系が適していたかどうかを確認する。その結果が思わしくない牛に活かす。特に成績が思わしくない牛は2等級、3等級の牛はどのような飼育方をしたのかを検証

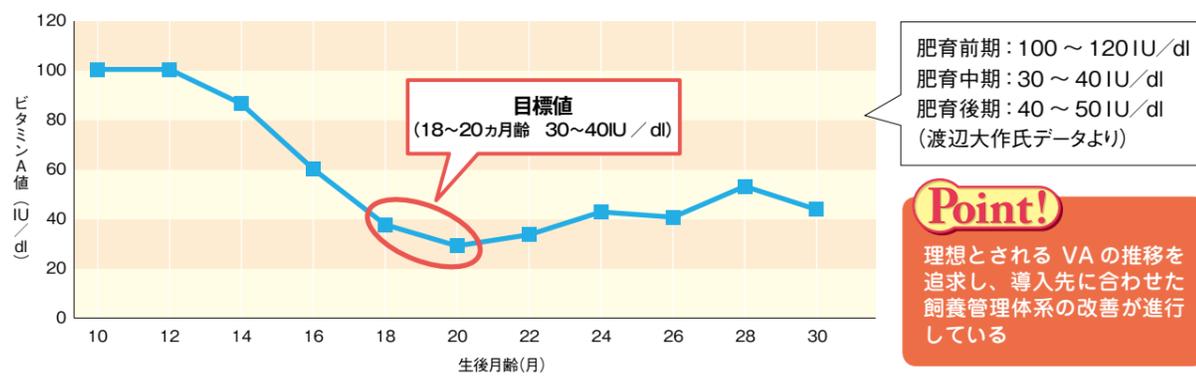
全国各地の市場から導入への対応

家畜市場に上場されている子牛は、血統や性別が同じでも繁殖農家の飼養管理や給与飼料などにより体型や発育が異なる。素牛を購入する際、牛の体型以外にもその牛が保有している血液中のビタミンA（以下V A）含量は気になるところだ。

響を受けやすいからだ。しかし、導入先によりV A濃度が異なるため、導入後同じ飼養管理（V Aの投与量、粗飼料の給与期間など）をしてもV A低下度合いが違うという課題があった。そこで、導入直後（約10カ月齢）と肥育中期（18〜19カ月齢）に血液検査を行い、導入先ごとにV A濃度の低下度合いを確認した。

導入時にV A濃度が高い地域の牛にはV Aを補給しなかったり、低い地域にはチモシーの給与期間を長くしたりするなど、各地域の特徴を

図1：理想とされる血液中ビタミンAの推移（黒毛和種去勢牛）



平成21年1月から10月に出荷した雌牛について、18〜19カ月齢で採血した59頭の血液成分と肉質等級の関係をみると、4等級以上率は83%であった。それらのVAは30〜40IU/dlと渡辺大作氏の目標値に当てはまっていた。また、総コレステロール値は

210mg/dl 前後と良好な値であった。2,3等級ではVA目標値を上回っており十分に低下していない。また、2等級では総コレステロール値が低いことから飼料摂取量が少ないことが考えられた。

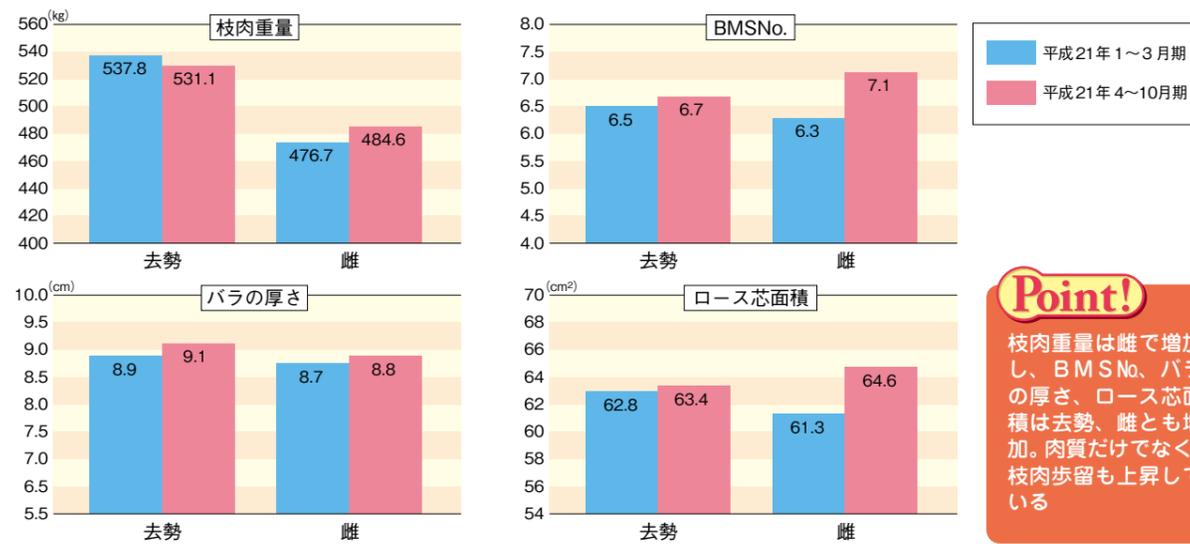
*北里大学獣医学部准教授

血液(VA)分析以外の取り組み・給与粗飼料へのこだわり



肥育前期には粗飼料を十分に食べさせることが重要である。価格が高くてその時期最もグレードのよい粗飼料(チモシー)を購入し給与する。さらに農場で初めて使用する粗飼料は自らβ-カロテンを分析する

図2：農場の出荷成績の比較(平成21年1〜3月期と平成21年4〜10月期)



DATA 事業規模

所在地：東海地方

飼養頭数：黒毛和種 650 頭

(飼養頭数割合：去勢 60%、雌 40%)

従業員数：6人